

(2011年09月02~04日実施)

第1回アジアじん肺レントゲン写真読影医養成講座を見学させて戴きました

2011年09月02日~04日、順天堂大学病院において、掲題読影医の養成講座を見学させて戴く機会を得ました。同会は、日本では初めての講座ですが、『国際AIR Pneumo ワークショップ』としては第四回目に当たるそうです。実際、過去にはタイやブラジル等でも開催されており、参加した研修生の中から読影試験の合格者が何名も誕生しているとのことでした。

【参加者募集でご協力】

基金にも参加者募集について協力要請があり、結果として国内から30名近い応募(米国からは自己負担で良いから参加したいとの応募も!)が入ったそうですが、電気容量の制限、会場費負担と工事代金により、自己負担の出来る国内の方14名のみを先着順で、という最終決定となったそうです。。事務局からは「放射線科医やじん肺審査関係の専門家、産業医学関係のかた、健診機関や開業しているクリニックの方など、誠に多彩な顔ぶれとなり、国際的なニーズを強く感じています」とのコメントが入っています。

【じん肺の原因】

私が知っているじん肺というのは、「アスベスト訴訟」で有名になった石綿(アスベスト)により発症するのだと思っていたのですが、実は畳の材料である「イグサ」によるもの等、他にも原因はあるそうです。私のこれまでの経験では、ベトナムやオーストラリアのトンネルプロジェクトの入札図書などには「きちんとアスベスト対策を講じること」などといった条項が「アスベスト対策」等といったタイトルとともに設けられていることが多いですが、発展途上の国においては、「環境なんて構ってられない! コストを抑えて利益をださねば!」というところも多く、もし入札条件に書かれていたとしても実際にそれが守られるとは限らないと思われるので、今回の映像等を見てショックを受けるものも多かったと、今思い出しています。



シャウカステンの映像を検討する受講生の皆さん



14名の受講生とペナント前で記念撮影

最終日の9月4日が試験日でしたので、私は、基金のニュースレターやホームページで紹介をした関係上、初日の午前と二日目に受講生のお邪魔にならぬよう、壁の花に徹しながら講師の方たちのお話を伺い、更に休憩時間を利用して、受講生の先生方とお話をする時間がとれましたので、オブザーバ参加レポートを作ってみました。概要は以下の通りです。

.....

【講座の概要・メニュー】

日時: 2011年09月02日(金)~04日(日:最終日は試験日)

場所: 順天堂大学病院(お茶の水)

主催: アジアじん肺読影医養成コース委員会, 日本企画運営委員会

共催: 日本医師会, 順天堂大学医学部放射線医学講座

後援: 順天堂大学, 福井大学, 日本呼吸器学会, 日本産業衛生学会

内容:

ILOの2000年版じん肺レントゲン写真国際分類(福井大学 日下幸則教授)、レントゲン写真の画像評価(獨協医科大学 荒川浩明講師)、じん肺理解における病理の必要性(獨協医科大学 本間浩一准教授):以上9月2日。
翌9月3日は、胸膜異常陰影(Dr. Ponglada Subhannachart, CCIT)、放射線医学の最新の知見(順天堂大学 桑鶴良平教授)、CTじん肺診断(高知大学 菅沼成文教授)、Air Pneumo試験と証書(日下教授)、日本とILO読影の差(滋賀医科大 村田喜代史教授)、30症例の多数独立読影練習及び講評、呼吸器病学の最新知見(順天堂大学 高橋和久教授)

.....

全国各地から14名の先生方が参加され、英語を主としたセミナーながら、皆さん真剣に講師陣の説明に聞き入り、メモを取っていらっやいました。以前に参加した学会の講習の場では、舟を漕いでいる人を見かけましたが、最終日のテストが控えていることもあってか、時折講師に質問を入れる、それも英語で、という『日本に居ながらも海外に居るかの様な』感じのする研修でした。



【突然のご指名に戸惑うも・・・】

冒頭、順天堂大学医学部長でILOの駐日事務所代表でもある新井一先生の特別講話に続いて突然ウェルカムスピーチを指名されてしまいました。。それも「英語で」との要請つきです。

新井先生の流暢な英語の後に続けということでしたが、中国の仕事を始めて20年近く経ち、ここ数年英語を話す機会もなく、日本語に続く外国語が中国語になってしまった私にとっては「錆びついた英語」であり、少し緊張してしまいましたが、基金活動と自分の業務内容について軽く触れた後に、「この講座を通じて皆さんのレベル向上と、参加者間の交流の輪が広がることを期待します」という、当たり障りのないスピーチをし、更に制限時間内で終わることもできたので何とかその場を取り繕うことができたのではなかろうかと、今再び脇下に汗をかきつつも思っています。実際、他の先生方がスピーチ原稿を用意されていたのに対して、メモもなしに英語で話をする、、というのは、台湾のプロジェクトで行き来していた時代から数えて4年経ちます。台北では、鉄道関係の業者(駐米台湾人)たちとの契約交渉や当社のプロジェクトマネージャ(アメリカ人)、他機関のエンジニアたちとは英語やフランス語で、現地スタッフとは中国語で、やり取りをすることになるのですが、原稿などは用意出来ない内容であり、その当時の感覚が蘇ってきた様な気がしました。

英語での質疑応答等、英語をかなり上手に話される医師の多いことに驚きましたが、私のスピーチ後の休憩時間に、「私、昔御社で産業医をしていました！」とお声を掛けて戴くなど、「世界は広い様で狭いな」と痛感しました。この先生とは講座の後にもメール交換をするなど、私の「友達の輪」が少し広がったようで嬉しい限りです。

【実際に聴講してみて・・・①画像評価】

初日の『レントゲン写真の画像評価』は、医師に渡された映像の画質をシャウカステンで評価する際のポイント等について触れられていました。医学知識が皆無の私ですが、大学生の四年間プロ写真家のアシスタントをしていたせいか、画像を見て、露出の過不足などについての評価の仕方について『だけ』は何とかついてゆくことが出来た様な気がします。また、画質の悪い写真を撮った技師に対してきちんと注文をつけるようにというお話もありまして、これも興味深く聞くことができました。

【実際に聴講してみて・・・②人体模型】

「以前に私のX線写真を撮ってもらった際に、この白い円はなに？と聞いたことがありますが、医師の答えは血管を真正面から見るとこう見えるのだというものでした。それにしても、どうしてここに問題があるのか、どうやって異常と正常を見分けられるのですか？」と、休憩時間中にある先生に素朴な(低レベルですが・・・)質問をしたところ、答えが極めて明快だったので印象に残すことができました。『宮本さん、本来あるべきものの形や位置等を知っていれば、そこにあるはずのないものに気付くでしょ？ たくさんの写真画像などに毎日接していると、「あれ？」というものが見えてきます。また、人体模型なんかを漠然と見ないで、しっかり見ておく、、普通の人でもこんなことは出来るんだけどねえ。』と言われて、納得してしまいました。でも、私にとっての人体模型は、理科室に飾られた『真夏の怪談ごっこ』の小道具でしかなかったもので、、今から改めてそれを見に行く予定はありませんが、あの時ちゃんと勉強しておけばよかったなとも思っています。

【肺がんによく効く薬について】

土曜日の最終の高橋先生のお話の中に「肺がんの死亡率が首位に、罹患率も第二位になっており、高齢者(65歳以上)肺がんが多くなっていること、2005年～07年のデータでは65%以上が肺がんになっていること等とともに、COPD等肺がんとの併発症が増えていること等」が指摘されていました。また、イレッサやタルセバに続く最近のアバスチン等の薬の長所や短所の説明とともにALK阻害剤「クリゾチニブ」がアメリカで8月にFDAにより承認され、これに後れをとるが日本でも承認されるようになれば、生存月数が飛躍的に増えるだろうという明るい話題も話されていました。

但し、『現在でも過去でも喫煙していた者には効かない』ということをお話の後に名刺交換をしたときに聞き、残念に思うとともに、『喫煙者に効果のある肺がんの薬』を作り、それをしっかりとPRすれば、今タバコを吸っている人も「煙草、真剣に止めようかな！」と思うこと間違いのないのだが、、等と一人考えつつ、会場を去った私でした。



デジタル VS アナログ
滋賀医科大学大村田先生の説明に聞き入る皆さん